飛翔する過去の時間

ちゃんの誕生日」に自分の名前をあてはめてほしくて、誕生日とは無関係にみんな「△△ちゃんもー」「××ちゃんもー」とどんどんリクエスト。もちろん保母は、気前よくリクエストに答えてあげるわけですが。

さすがに二月の誕生会では子どもたちから「○○ちゃんちがう。きょうはりゅうちゃんのたんじょうびやでー」「りゅうちゃんとみほちゃんのたんじょうびやなあ」などの声が出ます。「あんなあ、きょう、まさとのとうちゃんのたんじょうびやなあ」と四月生まれのまさとくん。ほんとかなあと、保母は一瞬思ったのでしたが、お迎えの時、お母さんに聞くと、その通りとのこと。どうやら誕生日はそれぞれの子に順番にやってくる、ということが、みんなが二歳を過ぎるころにはわかってくるようです。

月一回のささやかなとりくみですが、毎月回を重ねるうちに、「みんな（誕生会があるということは）同じなんだなあ」という共感も生まれるし、「自分はチョキなんだ（二歳なんだ）」という自分意識も持つようになり、「時間の認識」というようなものではないかもしれないけれど、二歳の子どもなりにその基礎になるものが育ってくるのだなあ、とあらためてわかったような気がしました。

（社会福祉法人京都保育センター・くりのみ保育園）

鉄道／写真／舞台「ピーター・パン」

首藤美香子

一九〇四年12月27日午後8時半、舞台「ピーター・パン」は英国のデューク・オブ・ヨーク座で最初の幕を開けた。劇作家J・M・バリにとっては初挑戦の児童劇であり、彼が「マイ・ボーイズ」と呼んで親しんだディヴィズ家の五兄弟へささげた愛の結実ともいうべき、個人的感興の強い作品だった。このとき、バリは44歳。興行界ではすでに多大な成功を収めてはいたが、「ピーター・パン」の上演には関係者一同悲観的で、その準備は秘密裡にすすめられた。というのも、それは従来にない実験的な試みであったからだ。

「ピーター・パン」は児童劇とはいえ、パントマイムやミュージカルが主体であったヴィクトリア朝の伝統を払拭し、大人の鑑賞に耐え得る本格劇へと移行させる最初の試みであった。それを可能にさせたのは、一貫した思想と方針で作家の意志を制作面に反映させるプロデューサーという専門職と、気に入った劇の上演には金に糸目をつけない興行主という、新しいタイプの演劇人の参入だった。

しかし、少なくとも四人の登場人物に飛行をはじめ空中で複雑な運動をさせるだけの技術の開発は困難をきわめ、その空間移動の拡大にともない、場面は子供部屋、ネバーランド、人魚の礁湖、地下の家（上半分は森）、海賊船、梢の場とダイナミックに展開し、大規模な装置を要するものだった。

たかが子どもの演劇に膨大な人、金、ものをつぎこんで、大人の観客をも呼び寄せることができるのだろうか。こうした制作者側の懸念とは裏腹に、舞

台は初日から熱狂的な支持を得て、以後数千回も上演されるほどの評判を取ったのである。(※)

ところで、幼年期とその遊戯的世界が主題化された、この「ピーター・パン」を大きな拍手と歓声で迎え入れた20世紀前後の英国は、時間に対する新しい感覚が醸成された時期にあたった。

いち早く産業革命を達成し、世界の覇者として君臨し始めていた英国には、力と速度の神話がみなぎっていた。その象徴を例えば、真っ黒な煙を吐いて直線的軌道を驀進する蒸気機関車にみてみよう。

ある空間的隔たりを従来の何分の一かの時間で踏破することを可能とさせた鉄道の発達は、「遠い近い」という感覚が客観的距離に由来するのではなく技術によって左右されることを発見させた。同一時間に進める距離が伸びた分、かつては永遠に分離されていたかに思われていた空間がどんどん開発され、孤立していた限りにおいて守られていた地方的な時間が、鉄道時間によって侵食されるようになる。

現代の我々からは想像もつかないことだが、ほんの一世紀余り前まで各地方にはそこでしか通用しない現地時間というのが散在していたらしい。ところが鉄道網の整備に伴い、路線ごとにバラバラであった地方時間を統一する必要から、まず鉄道標準時としてグリニッジ標準時が採用されたのである。そしてこの鉄道の時間がもとになって、一八八〇年にはじめて、英国で標準時が定められたのだ。

より前へ、より速くと力強く邁進していく時流が一方で、一元的時間軸に縛られ失われつつあった地方の牧歌的世界や、無残に置き去りにされていく過去の時間に対する愛惜や固執を生んだとしても不思議はない。ことに、5フィートそこそこで成長が止まり性的にも未成熟であったとされる、スコットランド育ちの田舎者バリには、現実の時間の流れを停めてしまいたいという願望がひときわ強かった。

バリは、産業革命以前に麻の手織り産業の町とし

て栄えた故郷キリミュアを舞台とした作品で小説家として名を上げた。その後戯作に転向し成功を収めてから陰気なまでに熱中したのが、自宅近くに住むディヴィズ家の五兄弟との交際だった。

「私には、この劇を書いた覚えがまるでない。確かに私は君たちをそそのかして冒険に駆り立てたが、実行したのは君たちだった。」とバリ自身語ったように、「ピーター・パン」は少年たちとの毎日の遊びのなかから着想を得ていた。とくにブラックレイクというロンドン郊外の松林に囲まれた小さな湖のほとりの別荘で、子どもたちと過ごした一夏の経験はバリにある決心をさせたのだった。

子どもたちはいつか自分の手元を離れていく。この冒険に遊び興じた夏の日々も、記憶の底に沈められ忘れ去られていくだろう。それには我慢ならない。過去＝幼年期をいついかなる時にも取り出して、心ゆくまで眺めることはできないだろうか。

当初バリは当時普及しつつあった写真というメディア―時間の流動を物質のなかに定着させ保存させる装置―を借りた。しかし写真では飽き足らず、ついにそれを「薄っぺらな芝居に仕立てて公衆の前に晒すことにしたのだ」った。

バリはその理由をこう語っている。「あれは君たち五人を少しでも長く引き留めておこうとする最後のあがきだったのか、それとも君たちを売り物にして一儲けしようという冷酷な打算だったのだろうか」。しかしバリの打算いや、あがきが国民的理解と賛同を呼んだのは、冒頭で紹介した通りである。

「大人にならない永遠の子どもピーター・パン」は、遠くのものを近くに引き寄せ、どんな時間的隔たりも楽々と乗り越えさせる技術を有した、力と速度の時代に喚起された時間意識によって、はじめて感受されることとなった物語なのである。

（お茶の水女子大学大学院）

※ 舞台の成功後小説化され、今日私たちの知るところとなった。